

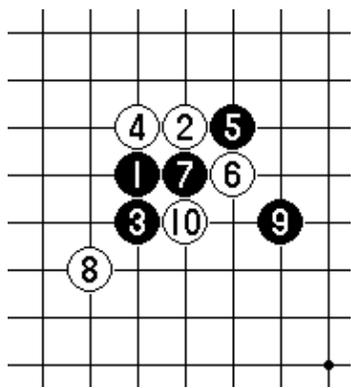
連珠っておもしろい

九段 河村典彦

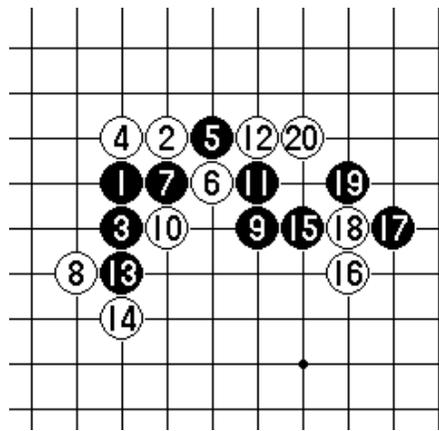
●第28回● 一路の違いが大違い(2)

今回は、名人位決定戦でも出た銀月（挑戦手合いは雨月からだが）の盤端の違いを調べてみよう。銀月も盤端関係が微妙にからむ形が多い。序盤は同型に戻ることが多いので、簡単な珠型といっても馬鹿にはできない。

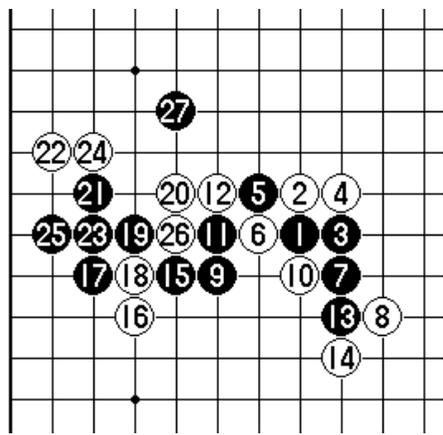
銀月黒5で白6は追い勝ち強要のような作戦であるが、打ち方を知らないとすぐに引き詰まる。一応、白10までが基本図である。



黒11は常用の手筋。四を打たずにミセ手から打つのが引き詰まらない工夫である。白は当然12とノリ手を打つが、黙って13と止めておく。白14は仕方がないが、黒15からは引き詰め勝ちがありそう。黒17と飛ぶのも常用の手筋で、黒19で成功と思われたが、白20で黒勝てない。盤端が災いして追いつかない。



ところが、雲月・雨月からスタートする形だと、盤端が違って追い勝ちになる。

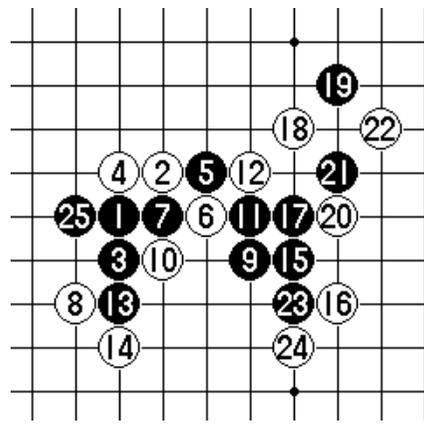
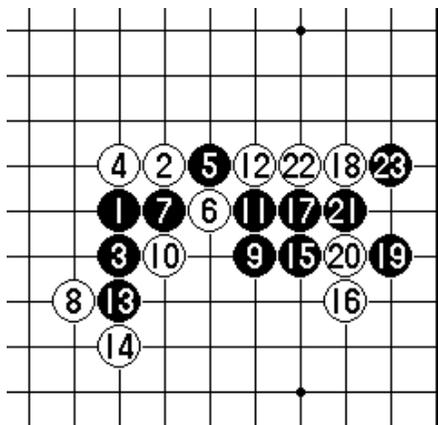


白4の押さえで黒5は慣手。ここで白6なら7、9で銀月に戻るというわけである。今度は17と飛び出した手が盤端から3路離れているので、黒25の余裕があり27で四三である。

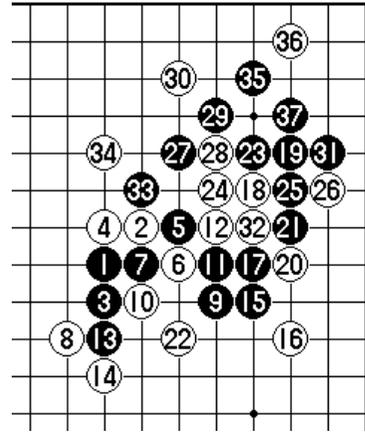
盤端が関係してくるのは当然追い勝ちを求めた時である。そこで、盤端に関係無く攻めるためには呼手が必要となってくる。では、この場合うまい呼手はあったのだろうか？
調べてみると黒17の四つ目が良さそうだ。例えば

白18に止めると黒19、23で勝ちが出る。

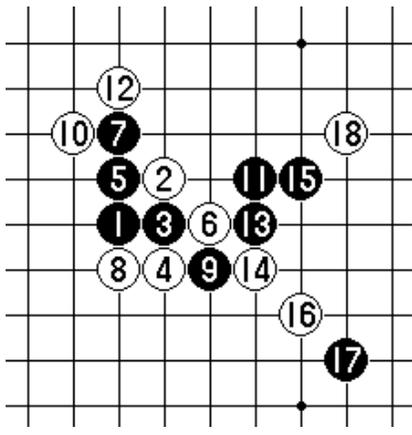
次図の白18、20なら25までだ。これは挑戦手合いの時に検討した図である。



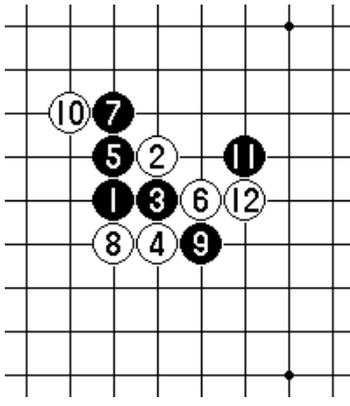
白22を反対も、黒23、25と打てば以下勝てる。



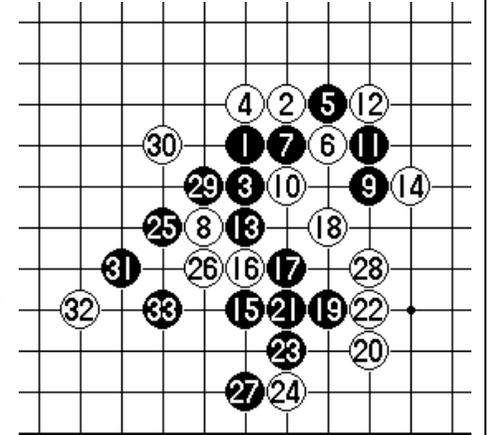
また、白20で左辺で攻めてみても、石数が足りなく到底勝ちに至らない。まさに呼手の効果である。左図は挑戦手合い第3局だが、



山口九段が白16と四ノビをしたのは、この四つ目を嫌ったからである。そのため今度は追い勝ちとなつたが、
ついでに言うと、白12がおそらく甘く、12はせめてこのぐらいにがっちり防いでおかないと黒にすぐ勝たれてしまう。(この形なら上辺での黒の追い勝ちはまだない)



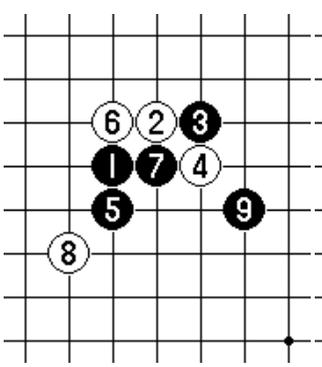
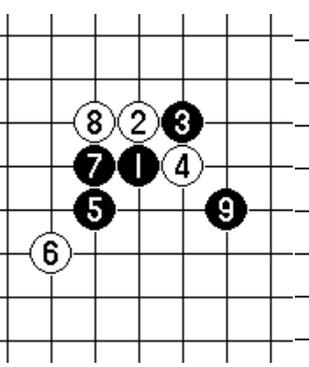
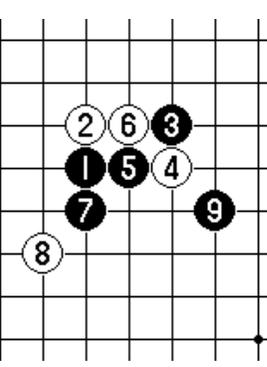
話は戻って、銀月からスタートした場合は、白14の下辺を防がないと、次の図のように打たれて今度は下辺が危なくなる。黒15、17とトビで攻められ、黒19、21と引かれると、黒の形が



しつかりしてくる。以下左辺と下辺をつなげて勝てる。白18の外止めなど細かい変化はあるが、おそらく黒勝ちだろう。

山口九段が打った雨月からの作戦も、黒の対策として銀月を想定していれば慌てずにすむ。長谷川名人は昔からこの銀月の作戦を良く知っていたので、快勝につながったのだと思つていい。

いとは思いますが、知っているのと知らないのでは雲泥の差がある。花月では盤端までの距離が違うのがわかるだろう。



峡月から

花月から

残月から